声 VOICE

観光を支える方々の声を寄稿、インタビューを基にお届けします

※五十音順で掲載しています

誘客の灯を絶やさず、未来へつなぐ

官民一体で切り開く長崎観光の新時代

一般社団法人長崎県観光連盟
専務理事 **明石 克磨氏**

今年は、長崎県にとって歴史と未来が交差する記念すべき1年となっています。1月に米ニューヨーク・タイムズ紙の「2026年に行くべき52カ所」に長崎が選定されたほか、日本遺産認定10周年や「長崎さるく」20周年、ツール・ド・九州、長崎ミュージックフェスマラソンなど、国内外から注目を集める好機が続いています。長崎ヴェルカやV・ファーレン長崎などのプロスポーツの躍動も、地域の活気を力強く後押ししてくれています。

しかし、足元を振り返れば、決して平坦な道のりばかりではありません。さる7月28日に発生した「令和8年熊本地震」の被災地では、今なお多くの方が避難生活を余儀なくされています。

地震直後の混乱期には、熊本県だけでなく、長崎県においても風評等による宿泊やツアーのキャンセルが相次ぐという厳しい現実に直面しました。私たちは、直後の8月、大阪で「長崎県観光大商談会」を開催し、「長崎は今も変わらず、安全に、そして最高の笑顔でお客さまをお迎えできる状態にあります」というメッセージを、参加された旅行会社の皆さまへ直接訴えてきました。あの時、観光を支える現場の仲間たちと誓い合った「誘客の灯を絶対に消さない」という強い決意こそが、今の私たちの原動力です。

本県では、熊本地震の影響により落ち込んだ旅行需要の早期回復を図るため、県内の観光事業者と連携の下、全国の旅行会社さまからのお力添えにより「『九州ふっこう応援割』ながさきキャンペーン」という実効性のある施策をいち早くスタートしました。私たちは、こうした「官民一体」の絆をこれまで以上に強めていくことで、逆境を乗り越え、真に選ばれる観光地へと飛躍してまいります。

また、令和8年度から始動した新しい長崎県観光振興基本計画のもと、関連施策を本格展開しています。物価高騰の影響を受けている観光業界の活性化を図るため、連盟内に特別チームを立ち上げ、海外での現地プロモーションをはじめ、さまざまな媒体を活用した情報発信のほかMaaSを活用した周遊促進などに、スピード感を持って取り組んでいます。

観光は、地域経済をけん引する最大のエンジンです。世界が長崎県に注目するこの千載一遇のチャンスを生かし、会員の皆さまとともに汗を流し、先人が築いてきた歴史や地域の魅力を磨き上げていく。「今こそ、動く。未来を変える。」その強い覚悟を胸に、私たちは選ばれる観光地・長崎県の未来を、官民の力で力強く創り上げてまいります。

札幌市が描く「持続可能な観光都市」

宿泊税を最大限活用

札幌市経済観光局観光・MICE推進部
観光誘致・受入担当課長 **数田 光嘉氏**

札幌市は、大自然とともにある北の首都として、国内外の旅行者に選ばれる持続可能な観光都市として発展させるため、令和8年度より宿泊税の徴収を開始し、新たな施策をスタートさせています。

特に「持続可能な観光地経営の推進」「観光資源の磨き上げと付加価値の向上」「受入環境の整備とおもてなしの向上」の三つの分野を中心に、さまざまな事業を展開し、来訪者の満足度向上と観光業の持続的な発展を目指しています。

一つ目の「持続可能な観光地経営の推進」では、4月に本格稼働を開始したDMOを中心とした戦略的な地域マネジメントとして、各種データの一元的な収集・分析、企画立案、地域への共有を一貫して行うとともに、札幌観光の課題の一つである閑散期の需要底上げに向けた誘客促進キャンペーンの実施や今冬新規就航する新千歳―サンフランシスコ線、新千歳―バンクーバー線を最大限生かせるよう、北米へのプロモーションを強化しています。

また、戦略的な誘客と市民生活の質の確保の両立を図るため、観光地周辺の除排雪強化や観光バスの巡回整理の拡充といった取り組みや、観光振興に対する市民の理解促進に努めています。併せて、人材確保や定着支援など、観光業を支える「人」への投資への支援も行っています。

二つ目の「観光資源の磨き上げと付加価値の向上」では、さっぽろ雪まつりやホワイトイルミネーション、YOSAKOIソーラン祭りといった大型イベントのさらなる魅力向上に取り組んでいるほか、開湯160周年を迎えた札幌の奥座敷・定山渓温泉においては、かわまちづくり計画に基づき観光スポットの再整備などを進め、札幌ならではの魅力にさらなる磨きをかけていきます。

加えて、冬の札幌の強みを生かし、都市観光とスキーを両方楽しめる都市型スノーリゾートのさらなる推進に向け、市内6カ所のスキー場の魅力向上に資する設備投資への支援のほか、市内中心部と各スキー場を結ぶ直行バスの運行等の実証実験にも取り組み、札幌を訪れる観光客の皆さんの利便性の一層の向上を図っていきます。

三つ目の「受入環境の整備とおもてなしの向上」では、宿泊施設のバリアフリー改修をはじめとしたユニバーサルツーリズムの推進や、公衆無線LANの機能向上、新幹線の延伸による新たな誘客の流れが期待されるJR札幌駅の観光案内所のリニューアルなどに取り組むことで、誰もが安心・快適に過ごせる環境づくりを進めてまいります。

今後も、札幌市では新たな財源である宿泊税を最大限に生かし、市民、旅行者、事業者の全ての皆さんが豊かさを実感できる「持続可能な観光都市」の実現に向け、さまざまな施策を戦略的に展開してまいります。

静岡県観光協会の歩みとDMO

今年度で創立80周年 さらなる情報発信、誘客を強化

公益社団法人静岡県観光協会
専務理事 **神戸 重敏氏**

静岡県観光協会は、昭和21年9月に設立され、今年度で創立80周年の節目を迎えました。これまで東京・大阪・名古屋や富士山静岡空港への観光案内所の設置、国内外での誘客キャンペーン等を展開し、平成25年に公益社団法人へ移行しました。

さらに平成29年には静岡県全域をエリアとする日本版DMOに登録され、観光地域づくりの司令塔としての役割を担うこととなりました。当協会には、市町や観光協会、温泉旅館組合、観光事業者等への支援を行う地域密着の公益的な役割に加え、マーケティングを駆使して地域の稼ぐ力を引き出す「観光地経営の中核組織」としての役割が期待されています。

また、近年のわが国の観光産業の状況は、コロナ禍を脱し、インバウンドをはじめとする旅行消費額は全国的には伸びておりますが、静岡県では微増にとどまっており、とりわけ訪日外国人延べ宿泊者数はコロナ禍前の水準を回復しておらず、観光振興施策の一層の推進が求められています。

こうした課題を整理し的確に対応していくため、当協会では本年3月に中期事業戦略を策定しました。この事業戦略においては、当協会の在り方を再定義し、「自ら考え実行する地域の司令塔として、域内消費の拡大に寄与する」ことをミッションとしました。これを実現するため、地域が主体となり文化や資源を活かして持続可能な観光を実現する「コミュニティーツーリズムの推進」や、来訪者の期待を上回る価値を提供する「高付加価値旅行の推進」などを事業の柱として定めています。

具体的な取り組みとして、今年度、消費者の個人旅行化やデジタル環境の変化に対応するため情報発信の強化を図り、観光公式サイト「ハローナビしずおか」の全面改修を行いました。スマートフォン対応や動線などを見直し、閲覧者が直感的に回遊できる環境の整備と旅行者のニーズをとらえた情報発信に取り組んでいます。また、インバウンド消費の増加につなげるためゴルフツーリズムの強化に力を入れており、富士山静岡空港への就航先と連携した空港周辺でのゴルフ誘客や、富士山を見ながらのプレーできる富士山周辺エリアでのゴルフ誘客を図っています。

今後も、海外では「富士山」をしずおか旅のコアバリューとし、また、国内ではアニメ、ロケ等のコンテンツを活用した〝推し活〟の拠点を目指す戦略のもと、地域のステークホルダーを巻き込みながら、事業を展開していきます。

観光で地域を育む

「観光教育出前授業」への挑戦

公益社団法人千葉県観光物産協会
専務理事 **小林 拓郎氏**

千葉県観光物産協会では現在、千葉県から観光プロモーション事業を包括受託し、各種事業を展開しています。当協会は「ツーリズムに携わる人々を繋ぐプラットフォームとして観光・物産の価値を高める」ことを経営理念に掲げ、国内外からの誘客や県産品普及を図るべく約35名のスタッフが一丸となって取り組んでいます。

事業を推し進める中で、県内地域ごとに観光に対する認識や意識の格差があることを実感しています。千葉県は温暖な気候に恵まれ、首都圏という一大市場に隣接する地理的優位性がありますし、この恵まれた環境ゆえにかえって地域ごとの課題意識に差が生じている側面もあります。

人口減少が進む日本において、交流人口や関係人口を増やす手段である観光は、国の戦略産業にも位置づけられています。現場では宿泊業界を中心に深刻な人手不足に直面していますが、単なる労働力の確保にとどまらず、観光事業を経営けん引する「未来の担い手」の育成・確保が極めて重要です。給与水準や待遇の改善はもちろん不可欠ですが、それ以前に観光業界全体の魅力向上に資する取り組みを社会全体で推進していく必要があるのではないでしょうか。魅力ある産業が地域にあれば、少子化の中でも若者が地元にとどまり、あるいはUターンして地域を支える持続可能な社会が実現します。観光がその核として定着することが求められています。これからの地域経済を維持していくためには、観光産業がいかに重要な意義を持つかを関係者だけでなく県民一人一人が理解し、意識を高めることが根本的に必要であると痛感しております。

スペイン語周遊型ツアー「Japón Colorido」

「多彩な日本」を楽しむ サステナブルな旅

株式会社JTBグローバルマーケティング＆トラベル
イベロアメリカ営業部 イベロアメリカ二課
玉田 美幸氏／モリナ 綾花氏

「Japón Colorido（ハポン コロリード）」は、スペイン・ポルトガルおよび中南米市場の現地調査に基づき、日本の桜鑑賞への高い需要と、インスター休暇における長期滞在ニーズに着目して造成した、13泊14日の周遊型ツアーです。定番のゴールデンルートにとどまらず、四国や九州といった地方の持つ豊かな地域資源に光を当て、その地域でしか体験できない魅力的な観光を組み込みました。

スペイン語ガイドによるシートインコーチ（乗り合い型バスツアー）商品とすることで、収益性を確保し継続販売が可能なビジネスモデルを実現したことが評価され、「ツーグランプリ2026」の訪日旅行部門において「観光庁長官賞」を受賞しました。

地域選定にあたっては、市場ニーズはもちろんのこと、地域固有の自然・文化、地域誘客への寄与といった点を重視しました。

四国と九州は、独自の自然や歴史、伝統文化を有しており、同市場から高い関心が寄せられていました。愛媛・大洲では、歴史的町並みを体感できる町家を改装した宿泊施設に滞在。別府では温泉体験、国東半島のお寺では護摩祈願、福岡・柳川では地元に伝わるつるし雛「さげもん」を鑑賞するなど、地域に根差した日本の多彩な魅力（Japón Colorido）を盛り込みました。

また、公共フェリーを移動手段に活用することで、四国と九州を効率的かつ魅力的に結ぶ周遊ルートを実現しました。さらに、地元の観光事業者との連携は、地域経済への直接的な効果だけでなく、観光地としてのノウハウ蓄積といった好循環をもたらしました。

また、サステナブルを単なるキーワードにせず、各プログラムにおいてサステナブルツーリズムの国際基準（GSTCスタンダード）に準拠した取り組みを明文化し、お客さまや観光事業者にも見える形でサステナビリティへの貢献を発信しました。

本商品は、四国と九州、それぞれの地域にゆかりのある私たちが「多彩な日本を味わっていただきたい」という思いを込めて趣向を凝らした旅程を企画しました。お遍路さんがお経を読む姿を興味深くご覧になったり、護摩祈願のお寺の和尚さまとの対話を楽しまれたり、フェリー移動について〝Perfecto!（素晴らしい）〟とお言葉をいただけたりと、お客さまのポジティブな反応に大きな達成感がありました。

この経験を励みに、チームメンバーとともに市場のトレンドを捉えながら、日本の新たな観光資源を見いだし、お客さまに喜んでいただけるツアーを提供してまいります。

「ほんまもんの京都」を次の世代へ

人と地域が育てる観光

株式会社ワン・ワールド
代表取締役 **山口 勝広氏**

京都を訪れる観光客が増え観光産業が活況を取り戻す一方、混雑や交通、地域との関係など、市民生活との調和が大きな課題となっています。

松井孝治京都市長がよく口にされる「ほんまもん」という言葉があります。私は、この言葉がとても好きです。「ほんまもんの京都」を守り育て、次の世代へつないでいくことこそ、これからの京都観光に求められていると考えています。

京都の魅力は、寺社仏閣や有名な観光地だけではありません。長い歴史の中で培われた匠の技、食文化、町家、祭り、そして何より、そこに暮らす人々の営みがあります。

観光は、単に「人を呼ぶ」ことが目的ではなく、訪れる人と地域の人が出会い、交流し、新しい価値を生み出すものです。そして観光によって生まれた消費や交流が、地域の仕事や文化を支え、次の世代へつながっていく。そんな「人と地域がともに育てる観光」を目指すことが大切だと考えています。

ワン・ワールドは、人材派遣をはじめ、地域や観光に関わる事業、イベント、人材育成などに取り組んできました。

そうです！

私が一貫して大切にしているのは「人」です。私の理念は「人に魅力を提供し、人を魅了し、人を虜にする」という考え方で、お客さまによし、地域によし、企業としてもよし、これが私の考える「三方よし」です。

その思いは、今春実施した「二条城桜まつり2027夜間事業」にもつながっています。国宝・二の丸御殿の夜間観覧で本物の歴史を知り、夜桜や光の演出で二条城を感じ、京都の伝統工芸や地域の「人」と「技」に触れて京都を感じ、そして、イマーシブシアター「城劇」によって、若い世代へ歴史と文化をつないでいく。単なるライトアップイベントではなく、「歴史を知る」「二条城を感じる」「京都を感じる」「未来へつなぐ」という一つの物語として捉えています。これは「京都の未来のための観光」の一つの形です。

このような考えに基づく取り組みを評価いただき、「京都観光行動基準推進宣言事業者」「京都観光モラル優良事業者」として表彰され、今年1月には「これからの1000年を紡ぐ企業」にも認定いただきました。「千年」という言葉には、今だけではなく、未来に何を残すのかという責任が込められていると感じています。

これからの京都観光は、「人と地域がともに育てる観光」へ。そして「次の千年へ文化をつなぐ観光」として、行政、企業、地域、そして一人ひとりが力を合わせ、「ほんまもんの京都」を次の世代へつなげることが、当社の使命だと認識しております。